

歴史研究に何ができるか

—『第4次 現代歴史学の成果と課題』を編みながら考えたこと—

若尾政希（一橋大学教授）

はじめに

1) 実行委員会からの要望

- ・現代社会の中で歴史学を学ぶこと、歴史研究をすることの意味について
- ・そのことと関連し、一人ひとりが学び、研究したことをどのように他者に伝えるのかという「歴史叙述」の方法
- ・ただし、総論・概論だけでは抽象度の高いものになってしまうので、具体的な思想史の手法についても少し言及

2) 東京歴史科学研究会編『歴史を学ぶ人々のために—現在をどう生きるか—』に「思想史という立ち位置」（岩波書店、2017年）を執筆。それ以前に、「思想史という方法—歴史と主体形成—」（『歴史学研究』914号、2014年）も書いた。歴史学入門として私が話せることはこれに尽きる

3) 2014年10月から17年5月にかけて、『第4次 現代歴史学の成果と課題—2001～2015年—』第1～3巻（編集委員：大門正克、小沢弘明、岸本美緒、栗田禎子、中野聡、若尾政希、績文堂出版、2017年）の編集に関わるという経験／現代の歴史学界を代表する錚錚たる方々と共に、私の能力を超えた仕事をするという稀有な体験

- ・とりわけ巻3「はしがき」より……「なぜ「歴史実践」なのか。それは2000年代から現在までの歴史学の研究動向をつかまえようとするときに、この言葉を使うのが最もふさわしいと考えたから」

- ・どうしてそう考えるようになったのか？、それを形成史的にみていきたい

1. 『第4次 現代歴史学の成果と課題』の構想と構造

- ・全体……大門正克「序章」、第1巻「はしがき」（文責：大門）、第2巻「はしがき」（文責：岸本美緒）、第3巻「はしがき」（文責：若尾）／「この15年のあいだに、歴史像の見直しと歴史学の見直しが進行し、史料・方法・叙述から研究、教育、社会にかかわる、あらゆる歴史家の実践的行為が見つめ直されるようになってきた」（各巻巻頭の「刊行にあたって」）／「歴史学の方法」（第1巻）、「時間と空間の再編成による歴史像のあり方」（第2巻）、「歴史家の実践的行為全般」（第3巻）

- ・全3巻の構造を簡単に

⇒ 【資料編 1】

- ・編集会議を振り返る……巻3「はしがき」を読む

2015年4月5日の編集会議／第2巻の5 歴史実践の現在……1. 史料、史料読解論 2. 「実証」という方法 3. 史料保存から歴史研究へ 4. 研究環境（若手研究者問題を念頭） 5. オーラル・ヒストリー 6. 史学史 7. 歴史教育 8. 歴史教育の実践 9. 歴史展示

「歴史実践の現在」を描きたいという問題意識は編集委員間で共有／この9つに限定させることに違和感を持った私は、現在の「問題感覚」に依拠して25項目までに拡大→同年5月6日の編集会議に提案／「全25節にまで一挙に拡大し、新たに第3巻を立てることに」／

- ・「歴史実践」とは何か／保莉実の「歴史実践」／歴研大会における「歴史実践」

◎「歴史に携わるすべての人々が日々取り組む史料・方法・叙述から研究、教育、社会にかかわることを一連のこととして歴史実践と呼ぶことにした」／「歴史修正主義の跋扈や人文・社会科学の危機、若手研究者問題など、歴史学をとりまく環境を踏まえたうえで、歴史の研究や教育に携わる人々が歴史にかかわる諸行為を「歴史実践」と位置づけ、「歴史実践の現在」を総体的に検証すべきだと考えた」

- ・具体的には、**I. 歴史学をとりまく環境**、**II. 歴史運動の現在**、**III. 史料・方法・歴史叙述**、**IV. 歴史教育の実践の四つの柱**を設定／私が提案／「おもしろい」と採用してくれた編集委員たち
- ・いったい、私がなぜこのように考えたのか？／なぜ私の提案が受け容れられたのか？

2. 自らの研究の軌跡を振り返る

・研究の軌跡……前掲「思想史という方法—歴史と主体形成—」（以下、「方法」と略記）及び「思想史という立ち位置」（「立ち位置」と略記）

1) はじまりは昌益研究から

① 思想形成の過程の解明（1980年代前半より）

・安藤昌益の思想的基盤の掘り起こし……昌益はどのような書物を読んだのか？

「安藤昌益の学問否定の本質」（卒業論文）『日本思想史への試論 1982年・1983年』みしま書房、1984年
『安藤昌益からみえる日本近世』東京大学出版会、2004年

「私が、1982年に卒業論文を書き始めてから今日まで一貫して取り組んでいるのは、安藤昌益の思想形成過程を解明する研究である。」「私は、昌益がどのような書物を読んだのかを解明する作業を始めた。昌益がいかにか「独創的な思想家」であったとしても、既成の諸学問を学んでいく過程があったはずである。昌益の著作を見ると、昌益は儒学・仏教・神道・音韻学・医学・本草学等々の既成の諸学問を厳しく非難・否定している。つまり、昌益はそれらの諸学問についてなにがしかの知識をもっているのがある。どうやってその知識を入手したのか、昌益自身はほとんど語っていないものの情報源があったはずである。そこで昌益の著作の、語句の一言一句に注目して、それを昌益が見ることが可能であった（昌益と同時代あるいは前代の）書物と比較対照する作業を根気強く積み重ねることによって、昌益が確かに読んだ書物を明らかにできる。読んだ書物がわかれば、昌益がそこから何を学んだのか、何を継承し何を否定していったのかという昌益の思想形成の過程を考察することができる。」（「方法」p2,3）

② 総合的思想史の提起（1980年代半ばより）

・民衆思想史研究（安丸良夫）

・儒学・思想家研究（丸山真男） 「頂点的思想家研究」

「私を悩ました昌益研究の分裂・分断状況である。「忘れられた思想家」であった昌益を著名にしたのは丸山真男であった。名著『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、1952年）において、丸山は近世の思想が封建的社会秩序をいかに基礎づけたのか、その基礎づけ方を問題にした。封建的社会秩序を「古モノモ天地ノ間ニアル」「自然的秩序」と説く朱子学（一七世紀）、そのアンチテーゼとして聖人の「作為」したものだと主張する徂徠学（一八世紀初頭）、さらに徂徠学によって「封建社会から疎外された」「自然」をもつて聖人の「作為」としての封建社会を否定した昌益（一八世紀半ば）と、自然と作為を指標に思惟様式の転換を描き、その中に昌益を位置づけてみせたのである。

他方で民衆史研究でも昌益は重要なアクターであった。一九六〇年代に、「幕藩制国家解体」の起点・「維新の变革」の起点として一八世紀半ばの宝暦・天明期に光があてられたとき、その一つの指標に民衆の政治意識の変質が掲げられた（『歴史学研究』304、1965年）。そのとき引き合いに出されたのが昌益であった。代表的論者であった林基はいう。「イデオロギーの上でも、宝暦年間には重大な画期をなす。最大の指標は安藤昌益の『自然真営道』の成立である」。封建制の「基礎である幕藩封建的大土地所有を根本から否定し、現存の一切の支配的イデオロギーを徹底的に批判した『自然真営道』の成立こそは、まったく画期的な変化の指標としなければならない。それは享保一宝暦年間における階級闘争の質的転化の過程が生み出したものと見ることができる」（「宝暦一天明期の社会情勢」『岩波講座 日本歴史 12』岩波書店、1963年）、と。また七〇年代前半に編まれた『日本民衆の歴史』（『日本民衆の歴史 4』三省堂、1974年）の中で佐々木潤之介も、「なんとといっても、この年代を特徴づけているのは、この時期に、安藤昌益が『自然真営道』を書いたということと、佐倉宗五郎の伝説が物語としてまとめられるに至ったということである」、「それはまさに、維新变革の起点のための序曲であった」と述べた。

このように、昌益は、二つの研究潮流の中に位置づけられたのであるが、問題はそれぞれが描く昌益像がまったく乖離していたことである。とりわけ、民衆史の研究潮流から六〇年代に登場した民衆思想史研究*は、丸山 of 思想史研究と厳しく対峙し、それを「頂点思想家研究」だと批判したこともあって、二つの研究潮流はその後も交わることなかった。昌益は、いわば二つの研究潮流の狭間に投げ込まれ、引き裂かれた。昌益研究は、両研究の分立の象徴的存在だったといえるのである。」（「立ち位置」p269-271）

- ・領主層（大名・執政）の思想研究←当時は皆無

「私は「幕藩領主層の思想史研究」を開始したいと考えた。だが、従来の、頂点的思想家研究と民衆思想史研究の外に、新たに領主層の思想史研究をうち立てることは避けようと考えた。前二者が分立し接点を見いだせず成果を共有できない現状で、それを行えば、研究はますます分化・分散化する。 そうなれば、意識・思想のレベルからのトータルな国家像・社会像を結ぶことは一層困難になってしまう。今求められているのは、領主層・民衆・思想家、この三者を総合的に把握できるような—いわば同じ土俵の中で議論できるような—基軸を見いだすことであろう。ではどうしたら良いのか。模索していく中で私が注目したのが、三者が共通してもっている通念・常識であった。ある時代、社会において、三者が共有する通念・常識が形成されているとすれば、それはどのようにして通念・常識となったのか。また、いかにして通念・常識でなくなったのか。通念・常識の歴史的形成と破綻という視角を導入することによって、時代・社会を描くことができると考えた。そしてこの政治常識とかかわって、領主層から民衆までの個人により、さまざまな思想形成が行われた。それら相互の関係性、葛藤と協調の諸相を描いていきたいと考えたのである。」（「立ち位置」 p276）

「秋田藩の農民政策と安藤昌益の学問否定」『季刊日本思想史』29号、ペリかん社、1987年

「『太平記読み』の歴史的位置—近世政治思想史の構想—」『日本史研究』380号、1994年

「安藤昌益の思想形成と「太平記読み」」『日本歴史』583号、1996年

「池田光政の思想形成と「太平記読み」」『仏教史学研究』40巻2号、1997年

「幕藩領主の思想史的研究序説—『陽広公偉訓』の歴史的位置—」『富山史壇』125号、1998年

『「太平記読み」の時代—近世政治思想史の構想』平凡社選書、1999年、のち平凡社ライブラリー

領主層や民衆の思想についても、関係意識のなかで読み解く必要がある

- ・百姓一揆物語

「百姓一揆物語と『太平記読み』」岩田浩太郎編『民衆運動史—近世から近代へ 2』、青木書店、1999年

- ・政道書（本佐録、東照宮御遺訓等）

「『東照宮御遺訓』の形成—『御遺訓』の思想史的研究序説」『一橋大学研究年報社会学研究』39号、2001年

「『本佐録』の形成—近世政道書の思想史的研究」『一橋大学研究年報社会学研究』40号、2002年

「謎の書物『土芥寇讎記』—「大名評判記」とはなにものか？」『歴史読本』52-7、新人物往来社、2007年

「頂点的思想家研究、民衆思想史研究、領主層（支配者層）の思想史研究についても、別個のものとするべきではない。民衆思想史研究の提唱者の一人である安丸が、七〇年代半ばに、民衆思想史研究から、民衆思想を踏まえた支配イデオロギー（それを説いた頂点的思想家の思想）の研究へと視座を移していることが示すように、三者の相互の関係性を問うていかねばならない。たとえば、民衆思想を研究する際にも、領主層と思想家の思想史研究を踏まえたものでなければならない。他の二つについても同様である。」（「立ち位置」 p278）

③ 地域からの思想史（1980年代末より）

- ・「地域からの思想史」

「延享期安藤昌益の思想—『博聞抜粋』の基礎的研究—」『日本文化研究所報告』28号、1989年

- ・「地域意識」の形成

若尾政希・菊池勇夫編『<江戸>の人と身分5 覚醒する地域意識』吉川弘文館、2010年

（参考）私が直接関与していないが、2016年に刊行された『歴史評論』790号（特集「近世日本の地域意識を問う」）は、それを継承してくれたもの

④ 総合史としての思想史（1990年代より）

- ・思想史を核として分科史を総合化しようという試み

歴史研究大会全体会「歴史と主体形成—書物・出版と近世日本社会の変容」『歴史学研究』820号、2006年

『近世の政治思想論—『太平記評判秘伝理尽鈔』と安藤昌益—』校倉書房、2012年

「以上のようにして私は、思想史が「人の意識・思想に焦点をあわせた歴史研究」だという確信を得ることができた。いうまでもなくこれは家永のいう「広義の思想史」と深く関わっている。政治史・経済史・文化史・思想史（狭

義の思想史)等々の分科史を通貫するとともに、個別分科史を総合して時代・社会のイメージをトータルに掴み、それを描写・叙述することを目指そうとするものである。」(「立ち位置」p277)

⑤ 「社会通念・常識」という研究視角(1980年代末より)

- ・ある時代の人々が共有した社会通念・常識といったものに関心
- ・「社会通念・常識がどのように形成され、破綻するのか」……社会の変革、社会の変容をとらえる視角

「安藤昌益の本草学—肉食をめぐる—」『日本文化研究所研究報告』1989年

「近世の政治常識と諸主体の形成」『歴史学研究』768号、2002年

「近世前期の社会思想」『政治社会思想史』山川出版社、2010年

「天変地異の思想」『図書』758号、岩波書店、2012年

「農業の思想」『岩波講座 日本思想4』岩波書店、2013年

「江戸時代前期の社会と文化」『岩波講座 日本歴史11』岩波書店、2014年

「近世後期の政治常識」『講座明治維新』巻10(編集小林丈広・若尾政希)有志舎、2016年

「「人の意識・思想」と言っても、誰々はこう考えていたと個別事例を羅列しても時代は描けない。よって私は、まずは、ある時代・社会を生きる人々が共有する通念・常識を把握しようと考えた。通念・常識はどのようにして形成されるのか。一時は絶対的なものに見えた通念・常識がどのようにして通用しなくなり別のものにとって代わられるのか、考察の俎上に載せたいと考えたのである。そして、通念・常識と関わって個々人(領主層から民衆まで)が意識・思想を形成していくのである。あるものは通念・常識に疑いをもち、あるものは通念・常識に疑念を持たないというように。現実のなかで悩み・葛藤しながら生きていく個人に着目し、その思想形成の過程を解明し捉えることによって、時代・社会を生き活きと叙述できるはずだと考えたのである。

「人」と一言でいっても、一様でない。とりわけ近世社会では、属する身分や住んでいる地域等々により相違がある。違いがありながらも、同じ書物を読み同じ通念・常識を持ち、思想形成も似通っているが、相違点をしっかりと押さえておく必要がある。自己意識、あるいは他者意識、その間の関係意識、また地域意識(生まれ育った地域への帰属意識や他地域への関係意識)といったものを視野に入れて考察していく必要がある。」(「立ち位置」p277,278)

⑥ 書物・読書研究(1980年代半ばより)

- ・「書物・出版と社会変容」研究(2003年より)

従来、手書きの文書だけが重視され、書物が史料として扱われて来なかった



書物をも史料として近世史を構想できる

- ・近世は商業出版が始まった「書物の時代」
- ・書物は社会通念・常識の形成にも、個々人の思想形成にも大きな役割を果たす

「書物から時代を読む—読書研究のすすめ」『一橋論叢』123巻4号、2000年

『歴史評論』605号、特集「書物と読書からみえる日本近世」、2000年(責任編集)

『一橋論叢』134-4、特集「日本における書物・出版と社会変容」、2005年(責任編集)

『歴史評論』664号、特集「日本近世の書物・出版と社会変容」、2005年(責任編集)

「書物・出版と社会変容」研究会(呼びかけ人若尾)編『書物・出版と社会変容』第1~20号、2006~16年

『シリーズ本の文化史』全6巻の企画・編集、平凡社、2015年~、5、6巻未刊

若尾政希編『シリーズ本の文化史 3 書物文化とその基底』平凡社、2015年、同書所収「書籍文化とその基底」、「近世日本の読書環境・流通環境」

島藺進・高埜利彦・林淳・若尾政希編『シリーズ日本人と宗教 5 書物・メディアと社会』春秋社、2015年、同書所収「書物・メディアと社会」

「私は卒論を書いた1982年から今日まで、昌益の学問・思想形成に決定的な影響を与えた書物、別の言葉でいえ

ば昌益の思想を生み出しその母胎となった思想的基盤とでもいうべき書物を掘り起こす作業を行ってきている。現在でこそ、書物に着目して書物を史料として歴史を叙述しようとする研究がふつうに行われているのだが、30年前のことである。先見の明があったといえれば聞こえはいいが、当時の心境を思い起こしてみると、「こんなことをやっていて、いったい何になるのだろう」、という思いに常に囚われていた。学会・研究会に参加しても、史料論や史料保存論で取り上げられるのは手書きの文書史料であり、書物が話題にされることはまったくなかった。問題意識や方法を共有するような人はひとりもおらず、深い疎外感を味わうばかりであった。当時、書物に関心をもつ歴史研究者は、ほとんどいなかったのである。

周知のように、戦後の歴史研究（とりわけ日本近世史の分野では）は、日本各地に眠っていた文書の掘り起こしと、その分析によって新境地を開いた。手書きの文書が一次史料として脚光を浴びる一方で、文書とともに出てきた大量の書物は、二次的な複製物（印刷あるいは書写による）であるとして史料的価値を見出されず、未整理で放置されてきた。」（「方法」p5）

⑦ 再び、思想形成の過程に着目（2000年代）

- ・コスモロジーと思想形成／ライフヒストリー
- ・思想形成の契機……矛盾・葛藤、書物、伝承・民俗

「『書物の思想史』研究序説—近世の上層農民の思想形成と書物』『一橋論叢』134-4、2005年

「当初、私は、経歴も修学過程もまったく謎だった安藤昌益を研究対象に選んだが故に、このような面倒な作業をしなければならなくなった。昌益なんてやらなければよかった、と何度も歎いた。だが、昌益の著作を形成史的視角から読み解く作業を続け、まったく謎だった昌益の思想形成が少しずつわかってくると、これまでの歴史研究、思想史研究に対する疑問がさざしてきた。すなわち従来の研究が、思想家の著作を形成史的視角から読んでこなかったこと。どういう書物を読んで思想を形成したのかという基礎的研究を行ってこなかったということに気づくことができたのである。

こうして私は、昌益だけでなく、他の人物を対象にして、昌益研究と同様の視角・方法による研究を行い始めた。」（「方法」p4）

⑧ 現代歴史研究の思想史的研究（2000年代以降）

深谷克己、安丸良夫、青木美智男の思想形成の研究（これについては後述）

⑨ 思想史研究の方法や立ち位置を自覚（2010年代）

前掲拙稿「思想史という方法—歴史と主体形成—」（2014年）及び「思想史という立ち位置」（2017年）

「思想史とは何か？、と問われたら、「人の意識・思想に焦点をあわせて歴史研究」と答えることにしている。なぜ、このように定義するのか。私がこう考えるに到った経緯・背景を、自身の研究の軌跡を踏まえて述べてみたい。」（「立ち位置」）

「私は、通念・常識を問うところから歴史研究を立ち上げたいと思う。私たちがいわば身にまとっていた通念・常識に疑念を抱きそれを対象化してその歴史的由来を追跡するとき、私たちは自身が今という時代の諸関係のなかに身を置く歴史的存在であることを自覚できる。一個の歴史的存在としてどのような主体を形成すべきかという人生の切実の課題も、歴史を学ぶことによって達成することができる。この意味で歴史学は自己確立・自己変革の学問であり、ひいては政治・社会の変革の学問だといえるのである。」（同前）

2) 跳躍せざるをえない経験（飛躍させてくれたのは）—その1 先学との格闘—

「以上述べてきた思想史の方法とスタンスは、もともと昌益研究を通して試行錯誤しながら摸索してきたことである。だが、その後、私は、これが昌益限定ではなく、広く近世という時代を生きた人びと全体にも適用できるという確信を持つようになってきた。さらには、現代の歴史研究者（具体的には青木美智男・安丸良夫・深谷克己*）の思想形成のプロセスについても、同様の手法により解明することができ、その時代・社会とともに活写できるという実感を持って現在に至っている。」（「立ち位置」p279）

①深谷克己との格闘 戸邊秀明氏からの依頼

「つながりあう歴史学—思想史研究から深谷克己を読む—」『民衆史研究』64号、2002年

「『近世社会の形質』（一九八四、『百姓成立』）でも次のようにいう。

しかし、二〇世紀末の今ではどう考えるべきであろうか。封建遺制克服にかかわる課題も今後長く残るにせよ、それを中心とするのではない問題の立て方で、現代日本の克服の方向が探られるべき地点にわれわれは生きていられると思われる。そして、今の時代と社会を相対化し批判しうる視点、覚醒させる要素、力の拠点を近世社会から探り出すために、これまで不動の前提にされていた枠組みに触れるような思考が自由になされてよい段階にきているように思われる。

戦後一般ではなく高度成長以降の現代にあつては、常住のなかの抑圧（管理）と自由（脱管理）の組み合わせ方、その表裏の間隙から自由の拡大への回路を発見することがとりわけ求められているように思われるのである。それはいわば現代日本人の、歴史認識の方法についての要請だということもできるのではあるまいか。」

すなわち研究を行う我々研究者の問題感覚が問われているのである。現代という時代に何が問題となるのかという歴史感覚をみがくことが、必要だとみなしていることがわかる。」（「つながりあう歴史学」）

「さらに、興味深いことに、「負担と御救」（一九八六年、『百姓成立』）では、「百姓負担が封建的抑圧のもとでの苛斂誅求であったことを否定するのではないが、百姓が「上納する」ことの契機と行為をいっさいそれで説明しようとする、逆にかえってこの時代に生きた多数の百姓たちのさまざまな知見や知恵、また彼らが払った多大の苦心を見のがしてしまうおそれがある。我々が現代の位置から持つ認識とは違っていたが、近世の百姓たちもまた、長い時間にわたる日本列島上の百姓存在についての歴史認識を持っていた。そしてその連続の意識に立って、近世に生きる者として自分たちを独自にとらえる時代意識をもっていた。」という。傍線部に注意されたい。研究対象である近世の百姓の時代意識をも問うているのである。ある歴史的地点に立つ百姓の目線から、問題を捉え直すことによって、「百姓負担が封建的抑圧のもとでの苛斂誅求であった」としか位置づけられてこなかったこれまでの百姓のイメージ、旧来の百姓像を転換し、蓄えた知見・知恵で時代を見ようとし現実のなかで苦しみ・喜びの感情を持つ百姓の像を描こうとしているといえよう。

以上のように、学生の歴史感覚（問題感覚、以下同じ）→研究者の歴史感覚→研究対象たる百姓の歴史感覚、それはさらに研究・教育によって学生の歴史感覚を揺さぶるというように、学生の歴史感覚→研究者の歴史感覚→……、という連環、つながりあう輪。深谷さんの歴史叙述は、このような連環のなかで成り立つものといつてよかろう。」（同前）

※時代の「問題感覚」を問うことの重要性を学ぶ

「以上、深谷さんの歴史叙述は、関係性、つながりあい（その重層性）において成立している。本稿に「つながりあう歴史学」という題を付けたゆえんである。もう一つ含意を込めれば、深谷さんが研究者と研究者をつなげてしまうそうした魅力をもっておられることを挙げねばなるまい。深谷さんを意識していつかは乗り越えたいと願っている私も、深谷さんが近年提出している「藩屏国家」論になぞらえれば、深谷さんをいわば光源として、藩屏のようにつらなりあっていることを述懐して、本稿を締めたいと思う」（同前）

・もう一つ、深谷が主導した近世史像の転換についても述べておかねばならない

「私が思想史研究を開始した八〇年代半ばは、今から振り返ってみれば、近世社会の常識的イメージ（近世史像）が大きく転換した時代であった。かつては近世という時代を語るときに、領主権力の専制的集権的性格を強調するのが一般的であった。むき出しの強権を振るう権力者と、搾取され抑圧にあえぐ民衆。鬱屈した民衆の憤懣が積み重なって百姓一揆が勃発。一揆は、革命を希求した階級闘争だと位置づけられていた。これは、七〇年前後の人民闘争史研究の時期に常識となっていた近世史像である。私が八〇年代半ばに学んだのもこれであり、当時の私には疑いようもないものにみえた。しかしながら、今から顧みれば、この近世社会像の基盤ともなっていたものが七〇年代半ばから八〇年代にかけてゆっくりと切り崩されて、八〇年代半ばにはついに常識でなくなった（通説の地位から転落した）」のである。

きっかけは、七三年に提起された仁政イデオロギー論であった。一七世紀半ばの金沢藩主前田利常の農政改革（改作仕法と呼ばれる）の分析から、改作の政策基調が、仁政（「御救」）を施すことによって小農民の家の保護・育成を目論んだものであることが見出された。この政策の実行によって、領主は百姓が生存できるよう仁政を施し、

百姓はそれに応じて領主に年貢を皆済すべきだという、領主と百姓の間に相互的な関係意識が形成されたと論じたのである。領主による仁政は、現代からみれば、階級関係を隠蔽するイデオロギーであることから、仁政イデオロギーと命名された。改作仕法は、寛永飢饉による武士と民の疲弊を、体制矛盾の表出と認識した幕藩領主が行った、初期藩政改革の典型と位置づけられることによって、同時代に通用のイデオロギーとして一般化されたのである。

仁政イデオロギー論は、百姓一揆のイメージも変えていった。「公儀」の「御百姓」である百姓は、自らの生存が脅かされる状況で、仁政を求めて訴願をし一揆を起こすのであるが、これはあくまでも仁政の回復を求めていると理解されるようになった。仁政が回復されれば、一揆は終熄するのである。仁政イデオロギー論の提起者の一人であった深谷克己は、七六年の論文「百姓一揆」において、「百姓一揆は幕藩制国家の存続を前提とする階級闘争であった」と結論づけた。これは保坂智が指摘したように、羽仁五郎らによってはじめられ、戦後民主主義運動の中で発展してきた百姓一揆論＝革命的伝統論との決別であった。七〇年代半ばに、百姓一揆像も大転換したのである。」（「立ち位置」）

②安丸良夫との格闘 大川啓さんからの依頼／安丸民衆思想史はいかに形成されたのかを課題

「むかいあう歴史学—安丸良夫から時代を読む—」『歴史学研究』854号、2009年

「1999年「ライブラリー版あとがき」で、安丸氏は、「研究史的にも問題意識や方法においても、本書の内容が、書かれた時代の刻印をつよく受けていると痛感せざるを得なかった。」と述べる。「そこにはまたそれが書かれた時代の状況とそれに向きあう私の姿勢とが、大きく影を落としてしまっている。本書の著者としての私は、民衆思想や民衆運動は内面的に説明できるし説明しなければならぬと確信しているが、こうした民衆史への関心は、この時代の精神史的な状況に根ざしたものであり、時代の状況に捉えこまれた私自身の選択の表現ともなっている」とも述べる。本稿ではこれまで、時代とむきあうが故に、民衆思想史を選びとらねばならなかった氏の主体形成を、不十分ながら問題にした。

時代の問題状況と個々人の選択という観点とは、『文明化の経験』序論でも、「私たちの歴史研究もまた、こうした世界の全体性に組み込まれたほんのささやかな契機にほかならない。みずからの主体的契機も含めて、こうした世界の全体性に向きあう立場を選ぶことでのみ、私たちの知的な営みは緊張と活力あるものとなることができるだろう」と強調されている。「あとがき」でも、『文明化の経験』の諸論考を読み直してみても、80年代以降の「自分がどんなこだわりにとりつかれて生きてきたか」、「自分なりにみえてくるような気がする」と述べる。「それを敢えて一言でいってみれば、広義の思想史を方法として歴史的世界の全体像に迫ること、またそうした試みのなかで自分の生の位置と意味とをなにほどこ掘り下げて捉え返そうとする拙い試みのあれこれだった、ということになるのか」と述べる。この一文から私は、氏が「思想史研究は、私にとって、人々の生の経験に近づくためのひとつの手だてである」（「序論」）と述べるときの人々には、出口なおだけでなく、安丸氏自身も入ることに、改めて気づかされた。安丸氏は、時代にむかいあい、歴史的世界の全体性にむかいあう歴史研究者であり思想家である。そのような安丸氏の歴史学を”むかいあう歴史学”と命名したいと思う。」（「むかいあう歴史学」）

『安丸良夫集』全6巻（岩波書店、2012～2013年）を編む（島菌進・成田龍一・岩崎稔と共編）

同集所収「研究と人生のはざままで—民衆思想史研究の軌跡—」、「安丸思想史の軌跡—民衆思想史から全体史へ—」

③青木美智男との格闘 偲ぶ会からの依頼／青木文化史研究はいかに形成されたのかを課題

「深読みする歴史学—青木美智男における文化史の発見—」『歴史学研究』921号、2014年

「実は、時を同じくして、深谷らが仁政イデオロギー論を提起し、安丸が『日本の近代化と民衆思想』をまとめている。それは60年代後半から72年まで盛り上がりを見せた人民闘争史研究後の時代でもあった。史学史のなかでこの時代をどう捉えるのか、青木文化史はどう位置づけられるのかという大きな課題が浮上してきたのであるが、もちろん小稿の任とするところではない。

青木に歴史学に話を戻すと、青木は、史料を深く読んで理解しただけでなく、時代や社会を深く読み、今日までの歴史学の行く先までを見通していたのではないか。ずっと先まで歩いていて、私たちが来るのを待っていたのではないか。私がもたもたしながら昌益の研究をしているのを見て、ときどき様子を見、声をかけ、私がようやくに

して書物や蔵書にもとづく近世史研究の必要性について歴研大会で報告したときに、それは青木にとってはすでに前からわかっていることであって、自明なことなのに、「大事な論点だ」と高く評価して下さったのではないかな。そんな気がする。

そのような青木の歴史学を、私は、「深読みする歴史学」と名づけたい。私たちのずっと前を歩んでいたであろう青木が、いったいどういう景色を見ていたのか、知るすべもない。私たちの傍にはもう青木はいない。寂しいし心細いのであるが、研究を一步でも進めることが学恩に報いることになるのだと思う。」（「深読みする歴史学」）→青木については、なお後述。

- ・この三人の著作を「形成史的に読む」という体験を通して、思想史研究の方法が敷衍できるという実感
- ・時代の「問題感覚」（深谷）
- ・歴史研究者（「歴史学徒」深谷）であるとともに、時代のなかで格闘する思想家である私もそうありたい

3) 跳躍せざるをえない経験（飛躍させてくれたのは）—その2 大会報告—

・日本史研究会、歴史科学協議会、歴史学研究会近世史部会、歴史学研究会全体会
「『太平記読み』の歴史的位置—近世政治思想史の構想—」日本史研究会1993年度大会個別報告、1993.10、立命館大学

「政治常識の形成と『太平記』」歴史科学協議会2000年度大会主題報告、2000.9、京都薬科大学

「近世の政治常識と諸主体の形成」歴史学研究会2002年度大会・近世史部会報告、2002.6、立教大学

「歴史と主体形成—書物・出版と近世日本の社会変容—」歴史学研究会2006年度大会全体会（大会テーマ：いま、歴史研究に何ができるか—マルチメディア時代と歴史意識）、2006.5、学習院大学

「2000年の歴史科学協議会大会で、私は「政治常識の形成と『太平記』」という報告を準備した。歴史は「物語」だという物語論の攻勢を受け萎縮している現状を「歴史学の危機」と捉えた私は、「物語」論と厳しく切り結んでいかに歴史学を立ち上げるのか、歴史をどう叙述していくのかという課題を自らに課し、日本列島における歴史叙述・歴史認識の歴史を振り返った。

続いて 2002年歴史学研究会大会近世史部会では、事態はより深刻化し、たんに歴史学という一学問の危機に止まらない、現代社会そのものが危機に直面しているのではという危機感を背景に、私は「近世の政治常識と諸主体の形成」という報告を行った。2001年の教科書（「新しい歴史教科書を作る会」による教科書をめぐる）問題と、同年9月の同時多発テロ後のアメリカ社会の変貌ぶりを前にして、自立した個人が担う民主主義という、これまで自明とされてきた理念が、現実の前に無惨にもその基盤を崩されつつあるという危機感を抱き、改めて「国家」や「民族」に拠らない主体形成のあり方を模索する必要性を痛感したのである。

そして、2006年ピラミッド校舎で行われた歴研全体会。「歴史研究をめぐる環境」も我々が生きる現代という時代環境も「危機的様相を深めて」いる（趣旨説明）という危機意識から、私は次のように述べた。我々はインターネットにより多様な情報を瞬時に得ることができる。しかしながら情報を取捨選択できる「主体性」を獲得できていないことは、2005年の衆議院選挙の結果が如実に示している。「小泉劇場」——政治権力とマスメディアの合作——の雰囲気呑まれ雷同する人々を眼前にして、私は強くそう感じた。今こそ、主体形成——ここで主体形成とは、自己をとりまく諸関係、社会・政治の構造との関わりにおいて主体性を形成していくことと定義する——が真摯に問われなければならない、と。

2013年の今、小泉劇場をアベノミクスと言い換えれば、今日の状況に当てはまってしまうことに——しかも問題がより深刻化していることに——戦慄を覚える。と同時に、主体をいかに形成するかという課題が、今こそ重要になってきていると考える。再び、「歴史と主体形成」を問題にする理由である。

1. 通念・常識を問う

ところで、2006年の報告でも述べたが、「主体」といったときに、それを即、変革主体と見なすのは適当ではない。もちろん変革主体という概念は堅持したい。だが「主体」という語をそのみに限定することは、現代が直面

している課題にはふさわしくない。

なぜなら、学生や市民を対象に歴史学を講義しているときに、我々＝変革主体論では説得力がないからである。むしろ我々＝歴史的被拘束論の方が、説得力があり、学生や市民を歴史学に誘うことができる。我々がいかに歴史的規定を被っているのか、我々が不変であるかのように考えている通念・常識が、実はその社会のなかで歴史的に形成されてきた歴史的産物であることがわかるときに、人は歴史学が自己に切実な学問であることに気づく。こういうわけで私は、通念・常識を問うところから歴史研究を立ち上げたいと思う。我々がいわば身にまとっていた通念・常識に疑念を抱きそれを対象化してその歴史的由来を追跡するとき、我々は自身が「今」という時代の諸関係のなかに身を置く歴史的存在であることを自覚できる。一個の歴史的存在としてどのような主体を形成すべきかという人生の切実な課題は、歴史を学ぶことによって達成することができる。この意味で歴史学は自己確立・自己変革の学問であり、ひいては政治・社会の変革の学問だといえるのである。

通念・常識は変わるものであるから、時代を区分する指標になり得る。すなわち社会のなかで、人々が共有する常識が形成される時期からそれが常識として通用しなくなる時期までを、一つの時代としてくることができる。これまでも歴史学が取り組んできた時代の変革という課題も、この視角から問題提起し直せば、次のように言うことができる。「ある時代、ある社会において人々が共有する通念なり常識といったもの（その秩序を支えている通念・常識）がどのようにして形成されるのか。またかつては疑いえないもの絶対的なものに見えた通念・常識がどのようにして通用しなくなり別のものにとって代わられるのであろうか」と。私が日本近世の政治常識に着目するのも、現代とは異なる政治常識がどのような過程を経て形成され社会に一般化し定着したのか、定着した政治常識がどのようにして破綻していくのか、そして破綻した政治常識とどのような関わりを持って、次代を担う新たな政治常識がいかんして形成されていくのか、その歴史を描いてみたいからである。そしてこの政治常識の形成の過程、あるいは形成された政治常識と密接にかかわって、領主層から民衆までのさまざまな主体形成が行われた。それら相互の関係性、葛藤と協調の諸相を描いていきたい。それは「歴史的被拘束」から我々自身をいかに解きはなして主体を形成するのかという、現代的課題とつながってくるはずであろう。」（「方法」p1,2）

研究の軌跡 → 私自身の思想形成の過程でもある

3. 歴史実践の射程

1) 大会の裏方役に就いて

⇒ 【資料編 2】

・歴史学研究会研究部長（2013.06～2014.05、その前年は副部長）として経験したこと
総合部会例会

全体会と特設部会……2014年度大会「いま、歴史研究に何ができるか」をテーマにして全体会と特設部会を企画。全体会では、歴史研究を成り立たせている3つの営み——すなわち①史料とは何か、史料をどう読むのか（史料論）、②歴史をいかに叙述するのか（方法と歴史叙述）、③歴史をいかに学び、いかに教えるのか（歴史意識と歴史教育）——に光を当てた。特設部会では、④災害等から資料を救出する資料保全の現場から歴史研究のあり方を考察

⇒ 【資料編 3】

（参考）2006年度：いま、歴史研究に何ができるか—マルチメディア時代と歴史意識
安村直己 権力・メディア・歴史実践—グローバル化と植民地期メキシコにおける歴史の生産
若尾政希 歴史と主体形成—書物・出版と近世日本の社会変容
加藤博 コメント

2) 研究部長の延長線（戦）として

2014年夏頃に歴史学研究会から『第4次 現代歴史学の成果と課題』編集委員就任を依頼。
10月5日から会合を重ねる

・主旨文の傍線部「歴史研究を成り立たせている3つの営み—すなわちⅠ. 史料とは何か、史料をどう読むのか（史料論）、Ⅱ. 歴史をいかに叙述するのか（方法と歴史叙述）、Ⅲ. 歴史をいかに学び、いかに教えるのか（歴史意識と歴史教育）—に光を当てて総合的に考察」

＋ 歴史学をとりまく環境

＋ 史料保全の活動を含めて、歴史研究者が取り組んでいる運動（歴史運動）

・歴史学のスケールをどう考えるのか

今という時代の＜問題感覚＞から引き出されたもの

歴史実践としてあげた25項目について、一つ一つ語りたいが、時間の制約もあり、それは不可能
→最近私が関わったことから二つだけ

①日本歴史学協会「若手研究者問題」シンポジウム2017 2017.3.4 ⇒ **【資料編 4】**
浅田進史・崎山直樹「歴史学と若手研究者問題」（『第4次 現代歴史学の成果と課題』）

「1990年代初頭に始まった大学院の拡充政策から四半世紀を経て、文部科学省が区分する「史学」の大学院生数は大きく減少した。修士課程の場合、1992年度の1121人から2015年度の762人へと、博士課程の場合、1992年度の721人から2015年度の444人へと、修士課程では3割強、博士課程で4割弱も減少した」（「趣旨文」より）

②日本歴史学協会史料保存利用問題シンポジウム（地域史料の保存利用と公文書管理の在り方）
2017.6.24、於駒澤大学／開会挨拶：高埜利彦（学習院大学教授 日本学術会議会員）

報告：西向宏介（広島県立文書館主任研究員）「自治体文書館のあゆみと地域史料保存—広島県立文書館の場合—」
／上田良知（神奈川県立公文書館非常勤職員）「神奈川県立公文書館の現状と課題—全量選別と人員配置を中心に—」
／小関悠一郎（千葉大学教育学部准教授）「地域史料の保存利用と資料ネットワーク—千葉歴史・自然資料救済ネットワークの活動を通して—」
／コメント 若尾政希（一橋大学教授 日本学術会議連携会員）
／閉会挨拶：木村茂光（日本歴史学協会会長 日本学術会議連携会員）

・『第4次 現代歴史学の成果と課題』には、これに関わって次のような論考

奥村弘「地震・水害時の歴史史料保存活動の展開と地域歴史資料学の提起—歴史資料ネットワーク結成21年の歩みを中心に—」

高橋修「史料保存から歴史教育、歴史研究へ」

瀬畑源「アーカイブズをめぐる運動」（『第4次 現代歴史学の成果と課題』）

※このシンポジウムで私は次のようなコメントをした

（1）最近の出来事から

・釜石フォーラム「なぜアーカイブズは必要なのか Part..2 地方再生に向けた公文書管理」、2017年5月12日（金）13時～、会場：釜石PIT 主催：国文学研究資料館第3研究グループ。釜石市役所職員の研修も兼ねて開催

3.11直後に、釜石市の被災公文書のレスキューに入って、現在に至るまで公文書の保全活動を行っている青木睦（国文研）氏の報告（「これからの被災文書レスキューと震災アーカイブズのあり方」）。地方都市が最近作ったアーカイブズとして注目されている天草アーカイブズの橋本竜輝氏の報告（「天草アーカイブズにおける公文書の移管と評価選別」）、同じく大仙市のアーカイブズの高橋一倫氏の報告（「公文書管理法を活かした新設アーカイブズ—大仙市の事例から—」）、熊本地震の震災アーカイブズの収集を行っている河瀬裕子（熊本森都心プラザ図書館長）氏の報告（「熊本地震 震災アーカイブズ収集の取り組み」）等々、実践報告

釜石市内の廃校に救済・保全された2万点以上の公文書／「これをいかに選別し、必要なものを未来に残していくのか、があなた方の仕事です」（釜石市職員への青木氏の言葉）

・桑原武夫（フランス文学者、1904～88）の遺族が京都市に寄贈した旧蔵書1万421冊を、市の右京中央図書館副館長が無断で廃棄（『京都新聞』WEB,2017年4月27日）／「おとし12月、改修工事のため保管場所がなくなったなどとして」廃棄。「桑原さんの蔵書であることを知っていましたが、大半が一般の蔵書と重複し、桑原さんの蔵書の目録を保存しておけばよいと考え、遺族の了解をえないまま廃棄の判断」（同日のNHK NEWS WEBより）。

→ アーカイブズ（書物も含めて）及びその保存・利用に関する知識と経験を有する人の存在が不可欠。そのような人材を養成することが急務

（2）書物研究を通して

・「書物を史料として歴史を読む」（『第4次 現代歴史学の成果と課題』第3巻、績文堂出版、2017年）……1990年代半ば以降、ようやく行われるようになった、書物を史料とした研究（書物研究と略称）の動向を叙述し、その歴史的意義を考える／戦後半世紀もの間、書物が史料として認知されてこなかった——書物に史料価値が見出されなかった——この意味を考えた／注意すべきは、戦後に大量の古文書が発見されたときに、同時に書物も出てきていたという事実／日本各地で史料調査が行われ古文書の整理や目録の作成がなされたときに、手書きの古文書のみが一次史料として重視され、一緒に書物が出てきても、邪魔物扱いにされ整理の対象とならなかったり、整理したとしても目録の「雑」の部に入れられ、分析の対象とならなかった／研究者には、書物が史料とは見えなかったという事実／

☆なぜ見えなかったのか？／青木美智男（1936～2013）……近世の社会経済史・民衆運動史・文化史研究で卓越した仕事を遺した研究者／青木美智男「科学的な近世史料学の確立を」（『歴史評論』289,1974年）／青木は、戦後の日本史研究のなかで、最も研究が進展したのは村落文書に基づく近世史研究＝村落史研究であったという。よって、日本各地で掘り起こされた史料を整理・分類する際にも、村落史研究上の問題関心に沿って行われた。「それらと関係の薄いものは、当然別あつかいされ、時には「雑」という項目に入れられ、さも、必要性とか価値が低い、というレッテルをはられているようにもみえる」という。しかし、「60年代の幕藩制史研究」、「70年代に入ってから民衆の主体性を問題にする宗教・思想・文化に関する科学研究や民俗学からの提言を歴史研究が受け止めた時、もはや、現在のような村落史を基礎とした文書学でよい、とはいえなくなった」。青木はいう、「われわれは、近世の村民たちが書き残してきたものを「雑」としてほうむり去るほどの学問研究を深化させてきているとはいえない」、と／青木は、「雑」に分類されたものの中に、手書きの百姓一揆物語や手垢のついた版本類、村人たちが詠んだ歌を集めた連句集等を見出し、それらが高い史料価値を持つと主張

→大きな教訓！／その時代の支配的な学問潮流を学ぶだけでは、視野が狭くなり、大事な史料を次世代に残すことができないということ／

※なぜ見えるようになったのか／いわゆる「言語論的転回のインパクト」／1999年の歴史学研究会大会全体会の二宮宏之報告……ロジェ・シャルチュエの著作を引きながら、史料は「書き手による表象の所産」であり、「歴史家による記述」も「物語性の領野に属」し、結局「歴史家の営みは、表象としての史料を媒介とし、さらにそれを表象するという、二重の表象行為」と発言／多くの歴史研究者が遅ればせながら、言語論的転回の持つ意味の大きさを知った／手書きの文書から事実を読み取ることができるという素朴な実証主義が成り立たなくなった／あらゆる文書は、作成者が何らかの意図をもって書いたものであって、研究者はその立場性を読み取る必要がある——その読み取りのプロセスが史料批判——ということが自明に／一次史料として特権的な地位にあった手書きの文書の、特権性が剥奪／史料と認知されなかった書物がその史料価値を上昇／

・史料として浮上してきたのは書物だけではない／90年代半ば以降、歴史学の材料となる史料が大幅に拡大／歴史科学協議会編（鶴飼政志・蔵持重裕・杉本史子・宮瀧交二・若尾編）『歴史を読む』東京大学出版会、2004年

I 新たな史料の「発見」

- a 行為をよむ 調伏／装束／中世渡来銭／近世の銭／江戸城／義民碑／外債／切手／海外神社／南京の写真
- b 場・空間をよむ 倭寇／棚田／最古の蝦夷／国境／筆子塚／馬車・電車／戦争碑
- c メディアをよむ 合戦図／名所記／見立番付／摺物／石川大浪と歌川国芳／出世双六／地籍図／レコード

II 文字史料を問い直す

- a コトバと行為と文字 偽文書／宣命／裁許証文／和歌—コミュニケーション／外交行為と海図／演説
- b モノ／文字のあらかずもの 正倉院文書／遺跡出土文字資料／金石文／和歌—民衆生活／藩庁文書／

『徳川実紀』と幕府日記／公家家職と日記／幕府外国方／太政官文書／官員録／植民地文書

c 史料としての書物 物語／年代記／軍書／武鑑／年表／明君録／陰陽道書／往来物／領事報告

III 「わたし」とは何か―名乗り・名付けの歴史学

渡来系民族／屋号／顔と平和／雅名／実名／加藤清正像／印／女性名／軍人墓

◎いまの私たちには史料とは思えないモノまでも選び取り、アーカイブズとして未来に残していく想像力・創造力が必要とされている

むすびにかえて

- ・『第4次 現代歴史学の成果と課題』編者として、このシリーズに込めた思い

一個の歴史に関わる者として／時代の問題感覚から引き出されたもの

- ・問題発見と解決のプロセス……通念・常識という視角→通念・常識との葛藤に着目

「ここで想起しておきたいのは、安丸良夫の歴史研究である。安丸は二〇〇七年の『文明化の経験』「あとがき」で、『文明化の経験』に収めた諸論考を読み直してみて、八〇年代以降の「自分がどんなこだわりにとりつかれて生きてきたか」、「自分なりにみえてくるような気がする」と述べる。「それを敢えて一言でいってみれば、広義の思想史を方法として歴史的世界の全体像に迫ること、またそうした試みのなかで自分の生の位置と意味とをなにごとにほどか掘り下げて捉え返そうとする拙い試み」だったと述べている。これを読んだときに私は、安丸ときわめて近い立ち位置に、自身が立っていることに改めて気づいた。

「自分の生の捉え直し」という課題を、本稿の議論に即して言い換えれば、「通念・常識を対象化すること」といえるであろう。本稿では、研究視角として通念・常識に着目してみようと述べたが、通念・常識に囚われていたのは過去の人びとだけではない。私たちの前にも現代日本の通念・常識がたくさんある。それらは、一時代の相対的なものでありながら、時代を超えた絶対的なもののような顔をして私たちを支配し束縛しようとしている。通念を鵜呑みにせず疑う姿勢を身につけ、その歴史的背景を考え、それを克服する能力を養うことが必要なのである。

私は、通念・常識を問うところから歴史研究を立ち上げたいと思う。私たちがいわば身にまとっていた通念・常識に疑念を抱きそれを対象化してその歴史的由来を追跡するとき、私たちは自身が今という時代の諸関係のなかに身を置く歴史的存在であることを自覚できる。一個の歴史的存在としてどのような主体を形成すべきかという人生の切実な課題も、歴史を学ぶことによって達成することができる。この意味で歴史学は自己確立・自己変革の学問であり、ひいては政治・社会の変革の学問だといえるのである。」（「立ち位置」p279,280）

※不思議だな、おもしろいなあという感覚（現代と違うからこそそう感じる）から出発

- ・おもしろさをどう伝えるのか……「歴史叙述」

「というような次第で、私は昌益がどういう書物を読んだのかを、史料（昌益の著作）を読み解くことによって実証的に解明してきた。しかしながら、たとえば昌益が『類経』を読んで医学理論を学んだことを明らかにする実証研究に対して、医学史や科学史に関心がある方は反応して下さるだろうが、それ以外の方にとってそれは、とりたてて興味を惹く話題ではないであろう。「あっ、そうですか」で終わってしまいかねない。一人でも多くの読者に読んでもらい、おもしろいと思ってもらえるようにする必要がある。いかに歴史を叙述するのかという歴史叙述を工夫しなければならない。私は、史料の読解（と実証研究）にかけたのと同じくらいの時間と労力を、歴史叙述に注ぎ込んできた。史料読解と歴史叙述は車の両輪のごときもので、どちらが欠けても立ちゆかないのである。具体的にしておこう。」（「方法」p6）

「何が必要か」ではなく、「何ができるか」可能性